

■生涯学習カレッジ（個人生活に役立つ講座）

「郷土と古都をつなぐ歴史の道」（平成22年9月9日～10月14日開催）から

講師に歴史研究家の上原敏さんをお迎えして、開催されました。

講座タイトル「郷土と古都をつなぐ歴史の道」には、次のような意味があります。

日本の歴史をたどっていくと、その中に、郷土の人物や郷土で起こった出来事がひょっこり顔を出してきます。また、同じように郷土の歴史をたどっていくと、中央の歴史と関連なくして、理解することはできないと気がつかされます。

つまり、古代から現代に至るまで、郷土と古都には同じ風が吹いていて、一本の道でつながっているんだと実感させられます。

これは当たり前のことのようにですが、こうした視点から私たちが住むこの地を見直すことで、より郷土を理解する一助となるでしょう。



①9月9日 屋島物語(生い立ちから幕末)

屋島は私たち讃岐人のこころのふるさとであり、日本を代表する瀬戸内海国立公園の一部でもあります。しかし、ただそれだけではなく、歴史と史跡の宝庫でもあります。この美しい山がそうありえたのはなぜでしょうか？

屋島が古来の人びとから愛され活用された理由として、飛鳥・難波から大陸への入口である朝鮮半島へ渡る重要な航路の中継地であったという地理的な利便性、また、目標がわかりやすく安全な場所であったということが挙げられました。

他にも、屋島の歴史跡として、長崎の鼻古墳、日本書紀にも記載されている屋島の城、屋島寺、源平合戦の古戦場など、屋島にまつわるいろいろな話が展開されました。

②9月16日 泣き笑い！万葉集の恋人達

日本でもっとも古い歌集といわれる万葉集。身分の上下に関係なく、あらゆる人々の歌が集められています。その歌の数々には、大らかな古（いにしえ）びとの日々の営みや心情がいっぱい詰め込まれていて、千年以上の時空を隔てた友人のように、私達に語り掛けてくれます。

自由で・素直で・大らかな万葉の歌。彼らが詠んだ歌に、時空を超えて励まされたり、また、友人に接するように共感が持てるのは、驚きです。これは、日本人の魂が永遠の時を掛けて受け継がれ、そして未来へと引き継がれて行くのだということの証明ではないでしょうか。そんな共感を覚えることがいっぱいある歌の数々が、歴史的背景を織り交ぜながら紹介されました。



③9月23日 瀬戸大橋に人生をかけて男達の伝説

瀬戸大橋は日本が誇る先進技術の粋を集めた巨大橋。その建設を成し遂げた真の主役は、世界で初めてという難題に果敢に挑戦し、英知を尽くして戦った男達の輪と、それを支えた家族でした。

昭和48年本四公団坂出工事事務所に所長として赴任し、全力を傾けて工事实現へと導いた杉田秀夫氏と、瀬戸内海一のダイバーと言われた飯島靖郎氏との、熱き友情と架橋への執念の物語が語られました。

④9月30日 革命児・高杉晋作と讃岐の志士達

高杉晋作は類まれな才能の持ち主でした。平時は天衣無縫なひねくれ者。しかし、この局面をどう乗り切るかの時になると、彼は「あっ！」と言わせる奇策で人々を救いました。奇兵隊を創設し、彼らを率いて藩を革命に導き、更には幕府にも打ち勝ち、時代を明治維新に導きました。そんな彼とまわりの人物、奇兵隊の活躍や、彼を育て援けた人たちとのエピソードが紹介されました。

長州藩の名君と言われる藩主・毛利敬親、難局にあった長州藩を思い切った政策でまとめあげた桂小五郎、松下村塾で若者達に新しい日本の形を説いた吉田松陰、奇兵隊の山形有朋、維新の英雄・坂本龍馬……。そして、対幕府戦争の前夜、窮地の晋作を匿った讃岐の日柳燕石など、幕末から明治にかけて壮大なドラマを展開した主役たちの逸話が語られました。

⑤10月7日 白峰に眠る怨霊・崇徳上皇の伝説

坂出・白峰御陵に眠る崇徳上皇は、史上最大の怨霊として恐れられてきました。今日では讃岐の守り神として慕われる上皇ですが、かつて彼が生み出したのは恨みの固まりでした。

保元の乱に敗れ讃岐へと流された上皇は、失意のままに林田の雲井御所や国府の木丸殿で過ごしますが、仏の安らぎを得ようと熱心に写経に打ち込むようになります。3年がかりで完成させたこの写経を、戦死者供養のためにと仁和寺に奉納しましたが、罪人の書いた経を受け取るわけにはいかないと、弟である後白河法皇の「二度と送って来ないように」という文が付けられ、送り返されて来たといひます。上皇の怨念は再燃し、さらに恨みが膨らんでいくことになります。



複雑な出生に絡んだ、父や弟への終わりのない怨恨・・・実は、それが怨霊の正体なのです。身近な讃岐の地名を聞きながら、上皇の悲運に思いを巡らせる回となりました。

⑥讃岐の英雄・細川頼之と白峰合戦

中世・讃岐の合戦、白峰合戦で躍り出た細川頼之は、遂に天下を席卷し、室町時代の黄金期を築きました。彼を支え、ともに活躍したのは、海崎元高、由佐秀介といった讃岐の武将たち、また、香川氏、奈良氏といった、関東から駆けつけた武将たちでした。

頼之は足利尊氏の一族である細川頼春の長男として三河・細川郷に生まれました。鎌倉幕府の滅亡、南北朝争乱という激動の時代に幼少期を過ごし、24歳の時、父の死を受けて細川宗家を継ぎ、同時に阿波の守護となりました。それから伊予の守護にも任命され、やがて備前・備中・備後も領国に加わります。瀬戸内沿岸一帯という、広範囲に渡る領土を治めるのは大変なことで、このことから、力だけではなく戦略に長け、人を引きつける魅力と知恵を兼ね備えた人物であったことが伺えます。

34歳の時、勃発した白峰合戦で勝利した頼之は四国管領となり、宇多津に四国を統括する守護館を建設します。讃岐をたいへん気に入り、ここを本領としました。高松市・田村神社の春市は、もともと「うまのかみ市」と呼ばれていたそうですが、その「うまのかみ」とは頼之の官職名であり、石清尾八幡宮の春市も同じように呼ばれています。民衆から慕われていたことが良くわかります。

40歳で室町幕府3代将軍・足利義満を補佐する幕府管領となり、幼い将軍の教育と幕府政治を担当します。このころは将軍の力が弱く、有力守護大名たちが寄り集まって政を決めていた時代でした。そこで頼之は、将軍の復権を目標として、市中の警察・裁判を幕府の直轄とすること、朝廷権力の掌握、税制改革による幕府経営基盤の強化、明との交易・・・などなど、多岐に渡る政策を繰り出しました。



有力守護たちから嫉妬を受けて51歳で讃岐へ引退するも、10年ほど後には再び将軍に召し出され、幕府政治に復帰します。やがて南北両朝の講和が実り、朝廷は再び統一されましたが、まるでこれと引き替えのように頼之は他界しました。将軍・義満みずからが葬儀を主催し、彼を送ったといひます。時は流れ、やがて戦国時代になると、細川氏の衰退とともに讃岐の豪族たちも力を失っていき、変わって、信長・秀吉の時代へと移っていきます。

讃岐とゆかりの深い英雄の、時代を代表する飛躍が紹介されました。

※掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法ならびに国際条約により保護されています。